



給食を通して、食の大切さと文化の多様さを学ぶ子どもたち。「食事の仕方やマナーの違いなどを切り口にする、すんなり世界のことを理解できるようにです」と井上先生

世界とつながる教室



料理クラブでブルキナファソ料理を作った時は、現地の人と同じように手で直接食べてみた

身近な食から世界を知ろう

アフリカの国々へ古着や文房具を送るなど、約20年前から国際協力に取り組む石川県金沢市立三馬みんま小学校。青年海外協力隊OG・井上奈緒先生が着任してからは、「食」を通じた開発教育にも取り組んでいる。

食への感謝と異なる文化への理解を

「えー、気持ち悪い!」
「そんなの食べるなんて!」
この日は、西アフリカ・ブルキナファソの食文化についての授業。「ブルキナファソには、食用の毛虫もいるんですよ」。石川県金沢市立三馬小学校の栄養教諭・井上奈緒先生がそう話すと、児童たちは顔を見合わせてびっくりしている。「でも、



「給食を残さなくなったよ」。毎日3食欠かさず食べられることのありがたみを知り、子どもたちに心の変化が起こっている

ブルキナファソの人たちに、「日本人は刺身を食べる」と話したら、今のみんなの反応と同じように、「気持ち悪い」と言われたんです。そう聞いて、ちょっと怒ったり反論する子どもたち。

「じゃあ、ブルキナファソの人の気持ちになつてみると、どうかな?」

井上先生の言葉に、子どもたちはじつと考え始める。日本人にとつての刺身と同じように、ブルキナファソの人にとつては毛虫を食べることが普通なんじゃないか。「たとえ自分と違っていても、それぞれの国が持つ食文化、風習、考え、生き方を尊重することが大事ですよ」。

三馬小学校は、金沢市内でも国際協力で熱心な学校の一つ。約20年前、近所の教会の外国人牧師からの紹介が縁で、ア

フリカのマダガスカルに支援物資を送る活動を開始。毎年、子どもたちによる運営委員会が中心となり、全校児童から古着や文房具を集めて現地へ送ってきた。

さらに、最近取り組んでいるのが、青年海外協力隊OGの井上先生による「食」をテーマにした開発教育だ。井上先生は2002年から2年間、現職参加制度※1を利用してブルキナファソへ赴任。「小学校の栄養士として働いていた時に、食べ残しの多さに驚きました。私たちの食生活は世界と比べて豊かです。日本の子どもたちに食への感謝の心を伝えるためには、私自身が世界の食事情を知らなくてはと思ったのです。ブルキナファソでは、地方の病院内にある栄養失調児センターに配属。周辺の村々を巡回し、母親たちに栄養バランス

を考えた離乳食の作り方や衛生管理の方法などを指導した。そして帰国後、今度は「食育」も行う栄養教諭※2として三馬小学校に着任。従来の学校給食の栄養管理に加え、給食の時間に各クラスの教室を回って食の大切さや食事のマナーなども教えている。

「ピーナツを料理に使うなんて初めて」「手で食べるとおいしく感じる」「なんだかアフリカの味!」と大満足。素材からはその国の気候風土を、食べ方からはその国の文化を知ることができ、子どもたちにとって「食」は、ブルキナファソについて楽しく知るための入り口なのだ。

そんな井上先生は、子どもたちにとつて、お母さんのような存在。「ブルキナファソでは、子どものしつけを地域の大人全員で行います。私も、はしや茶碗の持ち方などを子どもたちにしっかりと指導するよう心掛けています」。

こうした活動を続けるうち、子どもたちの行動にも少しずつ変化が現れてきた。「ブルキナファソの話をした後は、満足に食べられることが当然ではない」と、給食を残さず食べる児童が増えます」と井上先生。6年生の北野こころさんは、「生魚を食べなかつたり日本にはない食べ物があったり、国によって食文化がこんなに違うことを初めて知りました。今の生活に感謝して、残さず食べるようにしたい」と話してくれた。

給食の時間以外にも、社会科や学級活動の時間などを利用してブルキナファソの食事情を伝えている井上先生。栄養失調で命を落としてしまう子どもたち、栄養バランスの良い食事を与えることができない母親。日本では考えられないようなことが、ブルキナファソでは当たり前前に起きている。2年生の濱野郁也くんは、「おなかいっぱい食べられない子がいると知って、僕たちは幸せなんだと思いました。ちょっとでも助けてあげたい」と話す。

ブルキナファソをはじめ、貧困や紛争など多くの問題を抱えるアフリカの国々。少しでも支援できればと、昨年は、井上先生の隊員時代の縁でブルキナファソのストリートチルドレンにも文房具などを届けた。運営委員長の木下健斗くん(6年生)は「送った鉛筆でたくさん勉強してもらえたらいいな」と話す。

また井上先生は、料理クラブやPTA活動の親子料理教室で、ブルキナファソ料理を作ることもある。トマトやナスとピーナツソースのシチューをご飯にかけて「リソース・アラシッド」を、現地の人と同じように手で食べてみる子どもたち。

一方で井上先生は、「貧しい、イメージだけではなく、そこには生き生きと暮らす人々がいることも、子どもたちに伝えていきたいと考えている。食を通してアフリカとつながる。世界を思いやる心はぐんぐんだ子どもたちが、グローバルな視点を持った大人へと成長してくれることを期待したい」。



【上】世界での日本の役割について学ぶ6年生の社会科。青年海外協力隊の活動について紹介する井上先生の授業に興味津々
【下】一人一人の力をオレンジの粒になぞらえて「オレンジ作戦」と名づけられたアフリカへの物資送付。「小さな支援が形となり、大きなオレンジの実のようになってほしい」という思いが込められている

※1 所属先に身分を残したまま、休職などの形で協力隊に参加する制度。
※2 学校で食育を推進するため、2005年度に新設された職種。